

資料 島田市環境報告書に寄せられた意見と回答

第2次島田市環境基本計画において、公表した島田市環境報告書については、意見を募集しそれに対する回答を次年度の島田市環境報告書に掲載することとされています。平成26年度より作成しました環境報告書に対するご意見やご質問に対する回答や説明を下記のとおり掲載します。

意見1

島田市では、古布類の回収を実施しておりますが、回収量の拡大を図る計画はありますか。

回答1

回収量を増やすために、拠点回収場所の増設を計画しております。

意見2

耕作放棄地の畑部分には、茶畑も含まれていますか。

回答2

耕作放棄地の畑のほとんどが茶畑です。

意見3

島田市におけるPM2.5の観測はどのようになっていますか。

回答3

環境省が平成20年に島田市役所の敷地内に測定機を設置し、平成25年に静岡県に移管されました。それからは静岡県のホームページ内の「静岡県大気汚染常時観測システム」にて常時データを見ることができるようになっています。

意見4

島田市における環境放射線の測定はどのようになっていますか。

回答4

環境放射線の現在の状況等は、「静岡県環境放射線監視センター」のホームページ内にて常時データを見ることができるようになっています。

意見5

田代環境プラザ周辺には、再生可能エネルギーの発電設備がいくつかあるが、発電量などはどの程度ありますか。

回答5

太陽光発電である「ソーラーパークしまだ」は発電出力が1,500kW、田代環境プラザでは廃棄物発電（一部バイオマス発電）で1,990kW、伊太の小水力発電は893kWとなっております。再生可能エネルギーの集積地として注目されています。環境報告書への記載については、新たな項目の作成となりますので工夫して掲載できるように検討をしております。

意見6

田代環境プラザの発電出力は1,990kWと大きいですが、発電した電力はどのように使用されていますか。

回答6

田代環境プラザには溶融炉が2炉あり、2炉運転している際には田代環境プラザの電力を賄うとともに、余剰分については売電しています。ただし、1炉運転の際には電力が足りなくなるので購入をしています。

意見7

ノーカーデーはどのように実施をしているか。他の民間事業者へ展開していくことは考えていますか。

回答7

毎月第3週目をノーカーデーウィークとして、年12回実施をしています。普段の通勤で車やバイクなどを行っている職員が、公共交通機関や相乗り、自転車、徒歩で出勤するように呼びかけております。他の民間事業者への周知ですが、事業者の負担にならないように呼掛けを実施していくか検討課題としていきます。

意見8

島田市における部門別二酸化炭素排出量について、島田市役所の二酸化炭素排出量はどの部分に入りますか。

回答8

市役所の事務部門は民生・業務部門、田代環境プラザは廃棄物処理部門に入っています。

資料 植物相・動物

1 植物相

市内における近年の植物相を見る資料としては、「静岡空港整備事業に係る環境影響評価準備書(付属資料)」(平成6年7月、静岡県)があり、帰化植物を含む124科521種が確認されています。

本市では、宿場町や林業によって古くから人口の集中があったために、山間部ではスギやヒノキの植林が行われ、市街地近辺では水田や雑木林の造成、茶の生産など人間による土地の改変が比較的昔から進められてきました。現在の島田市の地形に植物相を照らし合わせつつ概観すると、北から南にかけて山地から里地、平野、河川、そして台地というように遷移する地形に合わせてそれぞれの植物相を形成しています。

山地では、商品木材として植林されてきたスギやヒノキといった針葉樹林が多くなっています。しかし近年、林業の不振から林業従事者の後継者不足・高齢化が進み、間伐などの植林地の手入れが行われず、暗く密生した林が増えています。

里地では、市内の人々が日々の薪炭に用いるためにコナラなどの雑木林や、茶畑やミカン畑のような農作物の栽培などが行われ、適度に人の手が加えられる形で農村的な二次的自然が創りあげられてきました。しかし、雑木林も薪炭として利用されなくなったため、手入れが行われなくなって荒れており、現在ではシイ・カシ萌芽林に変わってきたり竹が進出しているところも目立つようになってきました。

平野部は、河原や草原を開墾した水田と都市部を形作っていますが、近年の都市化や農業従事者の不足によって放置されるところが増え、セイタカアワダチソウやマメ類などの荒地に生える植物が進出しています。水田に水を流したり、材木の運河として市街地に張り巡らせた用水路は、防災上の観点から直線化・暗きょ化が進み、市街地から水辺環境は縮小してしまいました。

大井川河川敷は、かつては大井川上流から氾らんの度に流されてくる種子の発芽によって適度な生態系のかく乱が行われていたと思われませんが、近年のダム建設や河川改修などに伴って流量の減少・定量化が進み、水路が固定化したり洪水発生頻度が減少したために中州や河川敷の樹林化が著しく、湿地も水田への転換により大部分が消滅しました。川口から神座付近及び赤松付近に比較的まとまったヤナギ林が見られますが、礫質の土壤に生育するコゴメヤナギやアカメガシワが多く、それより下流では堤防によって河川敷は乾燥し、多年生草本のススキが多く見られるほか、つる性植物のクズが河川敷を覆っています。また、恒久的な陸地と化した中州にもヤナギ林が見られます。

そして、大井川南部(右岸)では、東部の平地は水田として、西部の台地は大規模な茶畑として利用されています。

このように、農林業によって開発・維持されてきた二次的自然が市域の大部分ですが、現在、農業の近代化によって土地の改変や農薬の使用が普及し、また後継者の不足などによって放置される山林が多くなり、竹林の拡大や林の陰樹林化のような生態的遷移が進み、植物相は単純化しています。

2 動物相

①哺乳類

「島田市北部開発環境影響調査書」(平成4年3月、島田市)によると、大津・伊太地域で資料や聞き取り、現地調査などで確認された哺乳類は、100ページの表の北部地域欄のとおり6目10科17種となっています。また、「静岡空港整備事業に係る環境影響評価書」(平成7年1月、静岡県)によると、近

隣自治体の一部を含む初倉地区南部地域では、下表の南部地域欄の4目7科12種が確認されています。

本市及び本市の周辺地域では、クマやシカといった大型種はほとんど見られず、その他の主な中・大型哺乳類の生息状況は、全体的な傾向として北・中央部の山地域で種類が多く、南部の丘陵・平地では種類が少なくなっています。

なお、北・中央部の山地域では、本市で見られる主な中・大型哺乳類が全て記録されています。特に川根地区では、ニホンザル、ホンダタヌキ、ホンドキツネのほか、シカやニホンカモシカが稀に見られることがあります。この他にコウモリ類や住家性のネズミ類等も生息すると考えられるとされています。近年の傾向として、大津地区から鶴網地区にかけ、人里と千葉山鳥獣保護区が近接している場所で、山での食糧確保が困難になったイノシシが頻出し農家への被害が増加していること、都市化に伴い蚊などが増え、それらを餌にするコウモリ類が夏から秋にかけて飛翔するのがよくみられるようになってきています。

北部地域及び空港整備地域一帯での確認哺乳類一覧

目	科	種	確認状況等	
			北部地域	南部地域
食虫	トガリネズミ	ジネズミ	捕獲	-
	モグラ	ヒミズ	捕獲	踏査
		コウベモグラ	踏査	踏査
霊長	オナガザル	ニホンザル	聞き取り	-
ウサギ	ウサギ	ノウサギ	聞き取り・踏査	踏査
げっ歯	リス	ニホンリス	聞き取り・踏査	踏査
		ムササビ	聞き取り・踏査	踏査
	ネズミ	アカネズミ	捕獲	捕獲
		ヒメネズミ	捕獲	捕獲
		カヤネズミ	捕獲	踏査
食肉	イヌ	タヌキ	聞き取り・踏査	踏査
		キツネ	聞き取り・踏査	踏査
	イタチ	テン	聞き取り・踏査	-
		イタチ	聞き取り・踏査	踏査
		アナグマ	聞き取り	-
	ジャコウネコ	ハクビシン	聞き取り	踏査
偶蹄	イノシシ	ニホンイノシシ	聞き取り	-

初出)「島田市北部開発環境影響調査書」(平成4年)「静岡空港整備事業に係る環境影響評価書」(平成7年)

注)分類については「第3回自然環境保全基礎調査 動植物調査報告書 哺乳類」環境庁(昭和63年)に従った。

②鳥類

「島田市北部開発環境影響調査書」(平成4年3月、島田市)によると、大津・伊太地域で現地調査で確認された鳥類は、12目27科73種となっています。また、「静岡空港整備事業に係る環境影響評価書」(平成7年1月、静岡県)によると、南部地域では、15目33科95種が確認されています。また、北部地域は文献による調査、南部地域は季節ごとの鳥類相についても確認をしています。

北部及び南部の鳥類相は共通する種が多く、どちらも二次的自然に生息する、いわゆる里山の鳥類相を呈しています。季節の変動をみると、生息密度は非繁殖期(秋季～冬期)に多く繁殖期(春季～夏季)に少なくなっています。これは渡り鳥のうち冬鳥が多く渡ってくるということで、本州中部以南の平地から低山の樹林帯における特徴を示しています。

しかし、市内において特によく見られる種類はホオジロ、ヒヨドリ、メジロ、エナガ、シジュウカラ等、国内において広く分布し個体数の多い種類です。特定の種類が地域の全種類の個体数の6～7割を占めており、市域の自然が農耕地や植林といった人為的影響を強く受けていて、種の多様性が低くなっていることが示唆されています。

さらに、北部地域については過去の資料からその存在が記録されていながら、最近の調査で確認できなかった種が5目6科10種あります。カイツブリやコアジサシなど渡りを行う鳥が多く、水田や森林といった、これらの飛来地域が最近の開発等で失われ、北部地域から姿を消したことが考えられます。ただし、アオサギやカモについては大津地区で、セグロセキレイやキセキレイは川根地区で目撃されています。

また、「島田市伊太田代地区土地利用基本計画にかかわる自然環境影響評価調査報告書」（平成16年3月、島田市）によると、同地区でクマタカの営巣と産卵が確認されています。

なお、政府の発行する「日本の絶滅の恐れのある野生生物—レッドデータブック」（平成14年、環境庁）において選定された種が、本市では7種が確認されています。

島田市で確認されているレッドデータブック記載鳥類

科	種	区 分	内 容	場 所
ワシタカ	クマタカ	絶滅危惧IB類(EN)	近い将来における絶滅の危険性が高い種	伊太田代
	オオタカ	絶滅危惧II類(VU)	絶滅の危険が増大している種	北部及び南部
	ミサゴ	準絶滅危惧(NT)	現時点で絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性がある種	南部
サギ	ミゾゴイ	準絶滅危惧(NT)		南部
	チュウサギ	準絶滅危惧(NT)		北部及び南部
ワシタカ	ハイタカ	準絶滅危惧(NT)		北部及び南部
	ハチクマ	準絶滅危惧(NT)		南部

③爬虫類・両生類

「島田市北部開発環境影響調査書」（平成4年3月、島田市）によると、大津・伊太地域の現地調査で確認された爬虫類は、下表の北部地域欄の2目3科6種、両生類は2目5科9種となっています。また、「静岡空港整備事業に係る環境影響評価書」（平成7年1月、静岡県）によると、下表の南部地域欄のとおり、爬虫類は2目4科8種、両生類は2目5科10種が確認されています。

島田市で確認されている爬虫類・両生類

分 類				現地確認状況		
綱	目	科	種	北部地域	南部地域	
爬虫	トカゲ	トカゲ	ニホントカゲ	○	○	
		カナヘビ	ニホンカナヘビ	○	○	
	ヘビ	ヘビ	シマヘビ		○	○
			ジムグリ		○	○
			アオダイショウ		○	○
			ヒバカリ			○
			ヤマカガシ		○	○
		クサリヘビ	マムシ		○	
両生	有尾	イモリ	アカハライモリ	○	○	
	無尾	ヒキガエル	ニホンヒキガエル (アズマヒキガエル)	○	○	

	アマガエル	アマガエル	○	○
	アカガエル	ニホンアカガエル	○	○
		ヤマアカガエル		○
		トノサマガエル		○
		トウキョウダルマガエル	○	
		ウシガエル		○
		ツチガエル	○	○
	アオガエル	モリアオガエル	○	
		シュレーゲルアオガエル	○	○
		カジカガエル	○	○

日本においては大部分の爬虫両生類は人里近くに集中して生息するため、本州で見られる種はほとんど確認できるとともに、北部地域と南部地域の爬虫両生類相はほぼ一致しています。南部地域に比べて北部地域の方が確認された種が少ないですが、爬虫両生類は目立たない種も多いので調査中に確認が取れなかった可能性も強く、実際にマムシは天津地区で確認しています。また、ニホンヤモリは南部・北部共に記載がない種類であります。平成14年に中央町で確認されており、住宅地を中心に分布の可能性がります。

トノサマガエルとトウキョウダルマガエルは目視での分類が困難な場合があります。現在はトノサマガエルが市の田園地帯で普通に見られることから、北部地域のトウキョウダルマガエルはトノサマガエルの誤認である可能性が強いと思われます。モリアオガエルは、北部では資料のみの確認とされていますが、現在は東光寺地区、相賀地区と田代地区で見られます。移入種であるウシガエルは南部の溜池で確認されていますが、北部の溜池ではまだ確認されていません。一方、旧市街地や東光寺地区など北部の平野部では、南方の種で西日本から急速に分布を広げているヌマガエルが新たに確認されています。

イシガメ、クサガメなどのカメ類については、本市においては危機的な状況にあります。農村地帯の川や池のほとりを生活環境とするカメ類は、護岸工事による生活場所の消失、餌となる小魚や水生昆虫の激減、自動車の増加による交通事故などで急激に個体数を減らし、わずか10数年前に普通に見られたこれらのカメ類は、市内の河川ではすでにほとんど見られなくなっています。

④昆虫類

「島田市北部開発環境影響調査書」（平成4年3月、島田市）によると、天津・伊太地域で現地調査で確認された昆虫は、主要なものだけで15目87種、「静岡空港整備事業に係る環境影響評価書」（平成7年1月、静岡県）によると、南部地域で確認された昆虫は、15目1,037種です。いずれも東海地方の平地から低山帯で普通に見られる種類ですが、その中で特に注目すべき種類として、北部調査では103ページの表のものが挙げられています。

昆虫類は、大変種類が多いうえに分類が難しく、また体が小さくあまり人目につかない生活様式をもつものも少なくありません。そのため市内に生息する種類を完全に記録することはきわめて困難です。また、市域の大部分が昔から農林業によって改変されてきた二次的自然であり、市民と生物との接点の大部分が農用地であるという特徴から、茶やミカンなどに専門的につく害虫もよく見かけます。茶につくアオバハゴロモ、ミカンにつくカメムシ類などは飛翔能力があり、街灯に集まる性質をもつ昆虫は夜の市街地に集まっているのを普通に見かけます。また、ミカンの害虫であるゴマダラカミキリはミカンの栽培がさかんな本市では特に大型で目立つ種類であるが、農薬の普及とともに最近では市街地ではあまり見かけなくなっています。

島田市で確認された注目すべき昆虫類

分 類		選定基準	調査方法	
上位分類	種 名		現地調査	資料調査
蜻蛉目	ムカシヤンマ	指標昆虫	○	○ (大津谷川中流)
	タベサナエ	特定昆虫C	○	
	サラサヤンマ	限定分布種、環境指標種	○	
直翅目	タイワンクツワムシ	限定分布種、減少種	○	
	アオマツムシ	特定昆虫B	○	
	ヒサゴクサキリ	特定昆虫B・C、限定分布種		○ (野田)
	マツムシモドキ	限定分布種、環境指標種		○ (大草)
網翅目	ベーツヒラタカマキリ	特定昆虫B		○ (市内)
半翅目	ハルゼミ	指標昆虫	○	
	ヒメハルゼミ	限定分布種、環境指標種		○ (市内)
	アカスジキンカメムシ	特定昆虫B		○ (市内)
	ウシカメムシ	特定昆虫B		○ (市内)
毛翅目	カタツムリトビケラ	希少種	○	
鱗翅目	フリチェホウジャク	限定分布種	○	○ (市内)
	アゲハモドキ	限定分布種		○ (市内)
	イボタガ	限定分布種、減少種		○ (市内)
	ウスバシロチョウ	特定昆虫B、限定分布種		○ (川口・大間)
	ウラキンシジミ	限定分布種		○ (市境)
	ミヤマシジミ	限定分布種、環境指標種		○ (向谷)
	クロコノマチョウ	分布限界種、環境指標種	○	○ (丹原)
	オオムラサキ	環境指標種		○ (川根)
	クロヒカゲモドキ	限定分布種		○ (川根)
鞘翅目	センチコガネ	環境指標種	○	
	ゲンジボタル	指標昆虫、環境指標種	○	
	ヘイケボタル	減少種	○	
膜翅目	クロスズメバチ	環境指標種		○ (市内)
	オオスズメバチ	環境指標種	○	
	ニホンミツバチ	環境指標種	○	
	オオツヤクロジガバチ	限定分布種		○ (川根)
	ミカドジガバチ	限定分布種		○ (川根)
	オオフトオビドロバチ	環境指標種		○ (川根)
	バラハキリバチ	環境指標種		○ (川根)
	トラマルハナバチ	環境指標種		○ (川根)

* 選定の基準は以下のように定義される。

指標昆虫：『分布域が広く、比較的馴染みがあり、かつ、全体として山地から平地での良好な自然環境の指標となる昆虫』として環境省が選定した昆虫類

特定昆虫：都道府県ごとに選定した昆虫類で、基準Bは『分布が国内の若干の地域に限定されている種』、基準Cは『普通種であっても、北限・南限など分布限界につながるとされる地域に分布する種』と定義されている。

限定分布種：分布域が県内の若干の地域に限定されている種

分布限界種：分布限界になるとされる産地に分布している種

環境指標種：当該種の存在により、残存自然の質・量を表示できるような種

減少種：個体数の著しい減少が心配される種

分布限界種：分布限界になるとされる産地に分布する種

希 少 種：いわゆるレッドデータの1区分であり、わが国に生息する昆虫のうち、『存続基盤が脆弱な種または亜種』に該当する種

出 展：「日本の重要な昆虫類（東海版）」（環境庁 昭和55年）

「静岡県の重要昆虫」（杉山恵一 昭和58年）

「日本の絶滅のおそれのある野生動物 無脊椎動物編」（環境庁 平成3年）

「昭和57年度 島田市総合環境調査業務委託報告書〈生物に関する環境精査〉」

（島田市 昭和58年）

⑤魚類

「島田市北部開発環境影響調査書」（平成4年3月、島田市）と、「静岡空港整備事業に係る環境影響評価書」（平成7年1月、静岡県）によると、北部地域及び南部地域では下表の魚類が確認・記録されています。

島田市内で確認された魚類

分 類			現地確認状況		
目	科	種	北部地域	南部地域	
サケ	サケ	アマゴ	○		
	キュウリウオ	アユ	○		
コイ	コイ	カワムツ	○	○	
		オイカワ	○	○	
		ウグイ	○	○	
		タカハヤ	○		
		アブラハヤ		○	
		モツゴ	○	○（池）	
		カマツカ	○	○	
		タモロコ	○		
		コイ		○	
		ゲンゴロウブナ	○	○（池）	
		ギンブナ	○	○（池）	
		タイリクバラタナゴ		○（池）	
		ドジョウ	ドジョウ	○	○
			シマドジョウ	○	○
	ナマズ	ギギ	アカザ	○	
スズキ	カジカ	アユカケ	○（大井川）		
	ハゼ	シマヨシノボリ	○	○	
		オオヨシノボリ	○	○	
		カワヨシノボリ		○	
		トウヨシノボリ		○（池）	
		ボウズハゼ	○		
		チチブ	○		

カワムツやオイカワなど、多くは河川護岸工事などの影響で平板化された河川などで優先する種が見られます。大井川本流では、環境庁の第2回自然環境保全調査において調査対象種とされたアユカケが確認されています。

また、川根地区の「野守の池」では、閉鎖性水域の湖沼であるため、近年水質が悪化しています。このため、以前から生息しているコイ、フナなどに対し、水質の悪化に強いブラックバスやブルーギルなどの外来種が増えています。